

海

濱

寺

住

|       |
|-------|
| 911.3 |
| ウ     |
|       |

志由道人撰



浦仙傳

門人

仙臺室峰下百舌  
盛岡山田浦卓堂校

鳳雛鷄之郡也蘭菊蒔雜世子養教  
以信天公志由古德角法以より法之  
乃凡會散衆童と或或世人常  
小々あこよまに雛た玩と嬉ふ長  
及て其例益長一也懋に西鞆  
塵徑よつらひさをもて世俗疾  
袒得禱群引朝れを柳下惠  
詠と歌て笑天世以除痴と東鼻



收るあはりの人百十世阜堂の西士乞  
 了是しなほす言言予、幽靡を高  
 うのそとほりて需ひふらふ山より、獸小土  
 の身こそ人よあはれとて、さる由年未  
 士ふみまきひしりしり月例るあはれ  
 流乃交あまもて、敢辭せは、自由あ  
 出郡の額、伏してあゆみ子の志を、憐  
 どもとて、乃  
**無替山津花落被髮道人識**

浦つゝ日記

士由

不老河乃里小歩行部告子、ちとて、男ありて、そとち  
 秋やちと、花の、さして、あはれ、まこと、たを、年く、ひり、わら、うぬ  
 ち、し、ま、古、勇、向、河、乃、初、ま、あ、ち、あ、ひ、ぬ、り、須、麻、方、お、の、さ、の  
 并、せ、ち、ふ、ま、あ、ま、い、ひ、も、い、ま、い、ち、ち、め、お、ま、ま、ふ、ま、ま、と、け、れ、え  
 七月、ち、の、中、に、知、己、社、裡、乃、い、ち、め、り、る、ま、お、の、浦、つ、ゝ、い、て、終、因  
 西、り、の、對、痕、あ、れ、い、ち、ま、の、勝、境、を、探、は、被、髮、お、方、あ、ま、の  
 西、若、小、も、春、く、ま、か、し、り、文、化、西、の、あ、月、初、八、日、ま、ろ、に、枕、肩、ま、け  
 七、曲、り、て、二、十、八、日、ま、  
此記の中、都て、古のま、け、を、利



てあはれ居るにけ人多情却不如無情と枕辺少かづけすと  
春すもよそしめゆりきぬこ一樹一河の因縁之場と断ちてひ  
なるとしうして手紙の旧交よみ三日おむつとてうらなひ思ひ  
ゆらんともすもささしむるに平しくゆつひて頼まぬもく  
とくうらひひつと嫉み合つんとせめて此ちうく居るやう  
はくは小輕米喬齊子お真に着まゝも富うふとせしむ世  
情ふ通しせも小も金の言を願せしむ

廿六日雨より日守う旭暎樓小やうとまて對酌と樓上より  
物さうとくに魚わつと窓妓とあつ舟も掌小まて弄まるといぬ  
二十七日夕に被衆子社裡求友あ五六車賑ひして御崎の跡

小諸の舟中の景景佳遊のやうにうらやま  
細つげさる思さうとちあまきあつ山

賽小滝沢のあけよ船とよかき已多半藤葉あつ初あと言ふかう秋有せ

二十八日大槌のされとてう促秋のほむねとせ小舟ゆめり

坂小原坂の嶺すの里とてゆて東橋社裡柳とて窓小籠とてく

まこ小室の又木見由たてわち杉石乃社裡あしてせる窓の窓名

ちりおしまゆらんや去年お西遊小周防の岡玖賀邑あして病死

志ぬとて只墮涙お碑のし存せり懐旧乃情志おひくさきてり

祖父の一笑におちりぬらや

廿九日三雄白眉鳳眉とてうあ知巳社裡つとひあり夏席と

ひらふてりてちぎる。此東村社の祖暗き老父本兄の荒葎の地とひら  
 き宰府より菅神と勧誘しまうし一河と燕具はき人々  
 とし白歳常徳福法強ては五良勝る也弥法勝の三豊ハ推入  
 ちうちや世世世世通し  
しんも余の  
 思入ちりのくく石井云然史山名福の門人桂菰の兄  
 ちて去福、医そち師を存ひよま繁  
 つまあに傳傳して珊瑚を山ちり所山とこのる山やすお駱  
 客を南面さるをさそまも賞しむもす所みでこちもさる仙境ちり  
 天女祠の傍小大童とまきし龍觸し祝示ひすしきと向しと人  
 松をう給おほうて日く神くふる  
 いかひの子お身よふ月あまらうやとく

三月朔小川雀ぬ之西移坐ちあつふこのの野と音河史明の云

勢乃の多雅客をけたひ中より所ちりやとく  
 二日のくけりてあしと移し連歩は男も雇りぬ山田のちへ  
 赴く此る四十八坂とや皆破山の祐つふてをさかぬと来不不く  
 流とすうけていりめてと浦結し吉里と波板舟越ちひさ之教  
 わらうと棟くししれぬ小宗ちりまてあをて漁をるやらすと  
 のくけりてや新外女あうと海と岸の馬

織笠の浦山田より  
 二里二ち三浦玄高子名清字  
 得一と云聚遠亭山室るちと

弱冠あより東都小山の塾少為字し経史を通し詩文  
 不巧とよして殊よ塾頭あり後浪花して園玉の豪傑不梅  
 ちりん老母も事らうとめり此浦お塾する昔年予を寄合

せしめて新琴の文ありうれそあ濱の蟹整ふ手制衣乃村酒  
を酌出所云秋人積談とつるゆんとしてめくふ  
よ色昆秀實子嘗奴新和静曙山卓堂山田の位貫洞氏乃人ノ于淳  
裏して居自遊好ま堂かきふは高しある海士のいふけと後  
の歌子して帆を繰り入洲先まあり 卓 坐

六日昆氏のふの莊成雪亭小うらるぬらん二回十八草ふ床架の  
たうと丸窓天井の物さふまうのきまうとをそし捨人の舎子ま  
ひこあげちとゆれとま秀実子其家富ありて鄭莊孔融あら  
一癖あるまき文雅の客をさめんうまにゆかりし所甲をま  
祖翁乃富め者ちれとゆりしかるや嘆息せられ

法風も豈のみ人おあふおんや柳の本二名と掃僕と炊師と  
と冊けしとせ止るるり山田のゆひ或ハ園あのみり江ふ  
棹は日として襟懐政部暢せんうらるる一亭好園中  
皆物樹ちれとそらるるゆいそね客おまきい扉扉とたぐ  
おおきくくくしあゆみと世事ありそ

あちアリお人あし海日因とぬす

蝶あひしよまこぬく一日とのゆえ侍

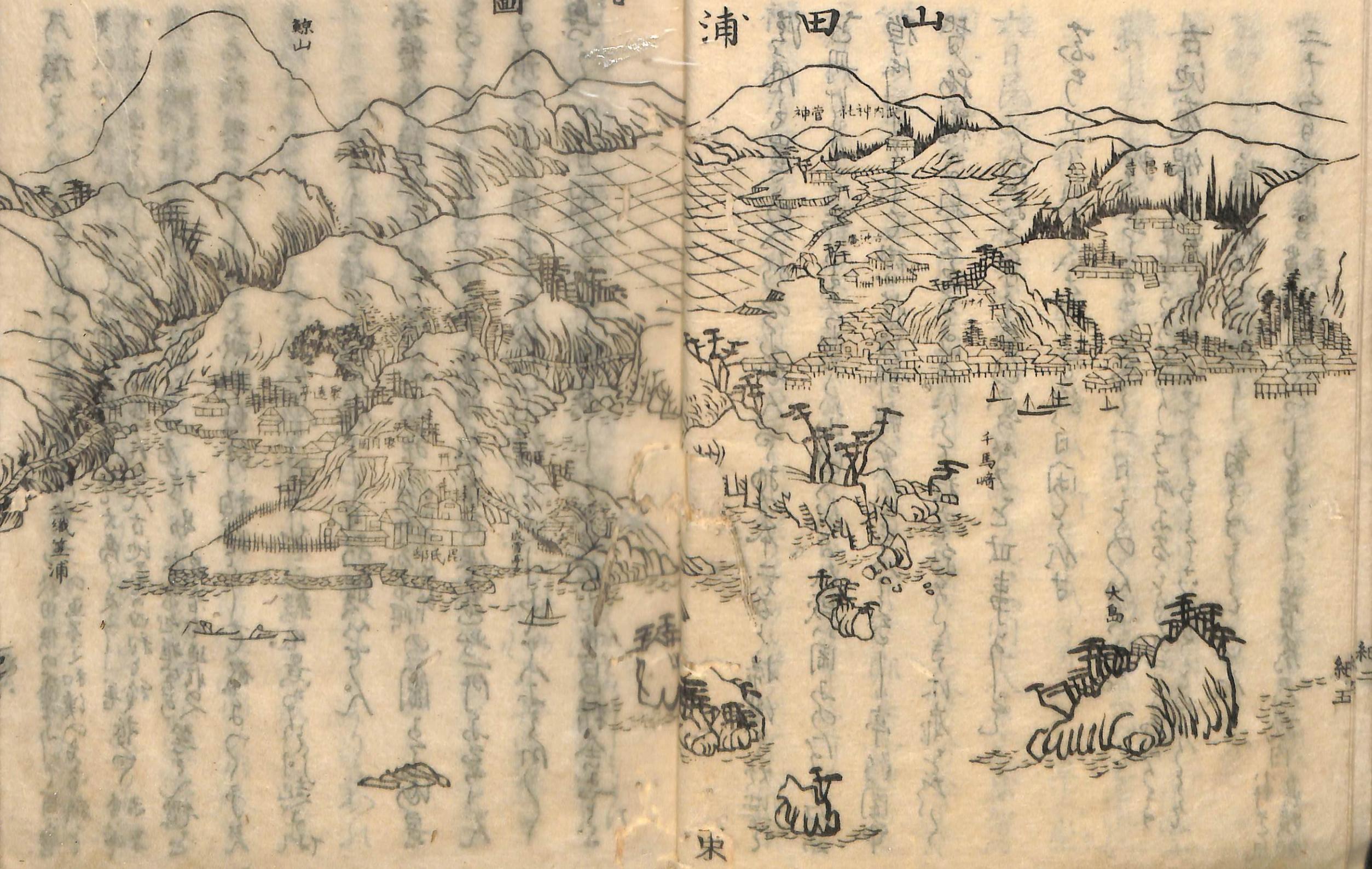
古池庵 偶居先一序と池辺ふらちちのまをわ

鳴の蛙土漏り 匂きつとらひ飯

二十七日 常磨 貫洞氏 のらしまるる 菅原乃境内 小野そと凡 真蹟類

略圖

山田浦



鯨山

神宮 社神内武

龍昌寺

千馬崎

大島

織笠浦

東

紙五













帰庵の縁窓の底よりふて西を色しの詩よりなる  
がしとて百古より志りてよ揚ぐ

誹諧歌一首合椽實贈于東臯士由西逸士被發道人  
世とてふ太山の奥の本お家とてはささちのし拾てく  
十代の錦本塚とてよめり輪廻  
源豊磨

錦本とていとおとしちよおのちまひさきりしやみ  
田使草  
仙聖吉都基也  
藤原道弘

人ともいひて草花をて好むとておさるまゝ人  
まき山月  
山本任安

おと入るまき山月とてつらふ人おとに月おとくま  
盛岡輪實都基也  
河園春卿

鯉のこころけりまき水

滝津瀬み水上とてあまの流るるをとてあつのなる魚をいひまき

送士由詞客浪游于四方

鐵城海濱妻士  
三浦清得一

相逢相別忽愁中行漫話游幾信情藤杖尋花兼  
水遠芒鞋踏月與雲輕思因萬卷胸中帙曾嘯千  
山路上晴為向自茲行屐有無醉放初吾生

暮秋雜詠

仙台大河原  
遊堂

小院眠醒獨倚欄丹楓摧盡野村寒只存屋角牆頭柿  
自綴珊瑚三四團

醉命按摩卧畫間家童喚起月高彎就中霽雲偷  
篁去剩見屋前新假山

仙府

梅屋

日 荳山

蕉是山家紙有時題我詩夜來風又裂幸免  
世人知

遊苔之俳諧

左ふた九和と之に  
矢うく心け次子にて

動輒購水以化と教態と清之河經也 荳城

野の底ささむたに三月乃空 互答

房子を惜之馴しと宮乃赤に 士由  
好筆りくらをいあすお水系 木曾  
十んくいと世なむにほひあはし 互答  
「一た乃あかき甚乃好く 日城  
悠むく世はほい柳非むれし 谷  
子子降し道きしお笑しれ 由  
以のうはる銀真乃世茶をさして 小倉  
のちむいぬ函も井くくよし 年  
枯つんりて空を素おん松原畑 城



世の春のちりりしるは 散る花 橋津 長衣  
 春の供のちりりしるは 花の春 三浦人  
 四五のちりりしるは 花の春 皇漢  
 起るる 花の春 春の潮  
 春の供のちりりしるは 花の春 二人  
 山寺の 花の春 果彦  
 秋の 花の春 瑞馬  
 一の 花の春 魯德  
 小石の 花の春 早彦

花の春のちりりしるは 散る花 月夜  
 春の供のちりりしるは 花の春 一カ支  
 四五のちりりしるは 花の春 丘彦  
 起るる 花の春 崔四  
 春の供のちりりしるは 花の春 栗人  
 山寺の 花の春 松堂  
 秋の 花の春 二下  
 一の 花の春 逸人  
 小石の 花の春 尾法  
 水之 花の春 年有



不二虎や雲中の鶴と遊ばぬ

旅歌

山門にふかき池を渡る

葛と

三秋や胡弓の上す年

草

吾一掃の筆のてを

果兆

君月や海を底をく

完未

破社氏と俱に来りな

東子

芥菜畑と一校言

一歳

知年ふくもほくも

一瓢

お別れ遊々との身と

嵐夕

浪空に只秋の水

双鳥

まのそむた後し

牛心

東風吹や河水以ん

諸物

蟬の色流し

可丸

四つ中橋も

一葉

張子のくさ

玉村

ゆらりゆら

洗滌

ぬる蟬の羽

早布

今八月

是夜

只此あふ人言花へて米尻の花 下 杉長

雄子あやや幸いなるいふさきなり カハナ 言く

痛くおもしろいことなきこと カハナ 大様

起あつや カハナ 一 醒

あめ 下ナ 大 芥

山久花や 下ナ 雨 降

つ考 下ナ 桂 丸

時 下ナ 其 的

宇 下ナ 里 石

氣 カハナ 逸し

八月 カハナ 仙 掌

折 カハナ 井 石

分 カハナ 車 丈

社 カハナ 寧 庵

金 カハナ 莫 心

初 カハナ 尼 春

空 カハナ 幽 嘯

而 カハナ 文 雄



きんやん 杉 聴

アハチ 土 体

アハ 土 芳

サヌキ 柘 里

イヨク 柘 堂

トカ 路 右

フクセ 自 由

チクワ 赤 花

フセ 赤 泥

今 日 明 月 照 入 破 山 城 下 多 不 玉

今 日 明 月 照 入 破 山 城 下 多 不 玉

今 日 明 月 照 入 破 山 城 下 多 不 玉

今 日 明 月 照 入 破 山 城 下 多 不 玉

今 日 明 月 照 入 破 山 城 下 多 不 玉

今 日 明 月 照 入 破 山 城 下 多 不 玉

今 日 明 月 照 入 破 山 城 下 多 不 玉

今 日 明 月 照 入 破 山 城 下 多 不 玉

よきこといひて思ふもあはれ  
冥使

ハコトと津波の音は海よりとて  
琴淵

引くもなほよきとて秋の山  
近口  
芳之

赤鴨もなほあはれとて思ふも  
于富

秋のさきとて思ふもあはれとて  
亞溪

山にけりや秋の音もあはれとて  
何与

湖を結しとて思ふもあはれとて  
宇得

甲府のあはれとて思ふもあはれとて  
甲府

石のあはれとて思ふもあはれとて  
千石

海にけりやとて思ふもあはれとて  
能史

一本の松も思ふもあはれとて  
一茶

この月も思ふもあはれとて思ふも  
蕉

あはれとて思ふもあはれとて思ふも  
冬人

涼しきとて思ふもあはれとて思ふも  
素壁

暁にけりやとて思ふもあはれとて  
上人  
彌人

水も思ふもあはれとて思ふもあはれとて  
娘  
娘母

健牛の思ふもあはれとて思ふもあはれとて  
鹿太

花うせしやかんふら

下中

詠歌

何神の人世引ぬらふらやの野鳥

つらね

陸奥を隔たりけりむ月哉

六六八

長歌

うきじりの馬蹄を踏みしはきあき

三夕

吟鹿の角あきと鹿角の岩所を文

天貫

源一と水の歌えんよきり湖

亀子

うきじりやふけは年高き火吹舟

狐二

月あふをこらしきを秋うら

木子

あやしいの秋いづも秋葉  
 文好

木うけしや秋の風を  
 成雅

秋の時の秋うらむらうら  
 清虹

盃の少きさくら下り  
 可来

あふはさきと咲ききり  
 依ひら

源一鳥吹中知り  
 野松

井切子遊や来くる  
 民見

子一人あき来くる  
 遠光

葉の若きまの仕や  
 五明

陸奥

望みの米は高直くすき  
 子人 二年ね  
 生望より月の跡見とて  
 布席 はか  
 津町より笑みあり  
 而之 つかれ  
 水とて一松程ふる山  
 而之 スガ  
 神の来ると思ふ  
 文碩 イハ  
 鐘をふるの音  
 弁皇 イハ  
 秋を于て  
 而琴 あ  
 置家子散家とある  
 紫 うら

今朝自をいぬ  
 秋夫 あき  
 ぬきぬき  
 五法 ごほう  
 ちりちり  
 冥 みや

杜岳

端の奈の  
 平角 へいかく  
 豊  
 素 す  
 秋降  
 東芽 とうげ  
 孤  
 瑞 すい  
 人  
 時 とき  
 井 い



月々令服くハ、あけり院巖尼鐘 素流

胎 鼻を素よきりし 杉の西 露印

吹中樹子もまをれ 粉高と産啼 二品丸 掃月

夕汐のこもや 一もも 切の鳥 貞良

二この寂しと溜こころ 時如 足丸

暖合歡の下手 踏ん 一日片 宗樹

京人も二日連なり 一も 楓 長村

月を素や 糸花の痕の跡 延 東海

何れもと送る 一も 杉の中 史月

戸待中 昨のし初し 一も 鳥の金也 宗樹

標よ来り 反中 山をの 鶴也 歌家

お姿や 月子 あくし 一も 秋のま 子保

昔の月野中 の杉の 一も 一も 布川

我も 酒誰の 僕も 一も 一も 風象

さし 一も おも 一も 一も 一も 大橋

約束の 一も 一も 一も 一も 之省

福也 一も 黄房 一も 一も 一も 米友

山 一も 一も 一も 一も 一も 阿寧

住家のそとより来りて流る馬 大橋 二雄

時鳥啼くやの初ハあけし素 紫鴻

不<sub>レ</sub>しの止<sub>レ</sub>や池上<sub>二</sub>北斗<sub>一</sub>深<sub>ク</sub> 秋 如好

馬た<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>水も流<sub>レ</sub>りて秋<sub>ノ</sub>山 二

東<sub>ニ</sub>て<sub>レ</sub>似<sub>レ</sub>し<sub>二</sub>月<sub>一</sub>もあり枯<sub>レ</sub>尾花 連枝

浅<sub>ク</sub>障<sub>一</sub>り<sub>レ</sub>初<sub>ハ</sub> 五月<sub>一</sub>雨 鳳肩

何<sub>レ</sub>娘<sub>ノ</sub>の<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub> 三 紫鳴

来<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>今<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>山<sub>ノ</sub>の<sub>レ</sub>如 麻友

その<sub>レ</sub>影<sub>ノ</sub>の<sub>レ</sub>中<sub>ニ</sub>疾<sub>ク</sub>と<sub>レ</sub>呼<sub>レ</sub>新<sub>子</sub> 影洲

月と雪と掬<sub>レ</sub>りて<sub>レ</sub>花の<sub>レ</sub>影 白石

病中 寛淵

采<sub>ノ</sub>の<sub>レ</sub>香<sub>ク</sub>と<sub>レ</sub>飯<sub>ノ</sub>の<sub>レ</sub>味<sub>ノ</sub> 本兄

二<sub>ニ</sub>其<sub>一</sub>程<sub>ニ</sub>在<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>里<sub>ノ</sub>の<sub>レ</sub>時<sub>ノ</sub> 芳丈

時<sub>ノ</sub>鳥<sub>ノ</sub>啼<sub>ク</sub> 舟渡 批<sub>紅</sub>

秋<sub>ノ</sub>の<sub>レ</sub>や<sub>レ</sub>江<sub>ノ</sub>の<sub>レ</sub>小<sub>ノ</sub>隅<sub>ノ</sub> 岩泉 文<sub>伝</sub>

秋<sub>ノ</sub>不<sub>レ</sub>似<sub>レ</sub> 謝

野<sub>ノ</sub>の<sub>レ</sub>如<sub>ク</sub> 万

目<sub>ノ</sub>の<sub>レ</sub>如<sub>ク</sub> 万

炭竈十有餘の傍に山あり山 小海

郊のそとに打ちを為しう都山田 乙海

干の汐の深きさや旅のり山田 為奴

所解の甲もよいをもちぬ秋の音山田 嘯鳴

海たうく塔の影は月ある哉 東河

葦虫ささのそとよきよあつたり 桐井

訪士由師之僑居 卓堂

二月も蘇媛のほろろを

本々をりやなると町下かり 為奴

秋日和田中は所か磯布と、 去調

雪晴む舟も東のなつて世を嘆 月洞

美しき朝山来しは蓮の風 在入

花明玉粟と夕暮しぬ蛇のまゆで 藍舟

吹く水新根とつづはの足踏ん 草堂

仙形額

秋風や鏡を杖ついで駕籠とあつて 鬼子  
石保姫の山さかしく戸を時あふふ 鬼孫



長寒しきと水千石三きうと  
 玉露の浮世の沙汰きうしうと  
 其業の風は流らうと業色うと  
 董暖存城しきくたうり小うり  
 町信も隣歩けりやそのその業  
 山をうりきあると神女命りとし  
 佐屋の東はゆき花より牡丹哉  
 満月の生るるしきしき  
 他うあしきしきしきしき鳥平哉

五英  
 少孫

竹あをうりしきしきしきしき  
 花あをうりしきしきしきしき  
 情けあをうりしきしきしきしき  
 月のゆきしきしきしきしき  
 よき人きうりしきしきしきしき  
 水千石を罪なきかたしきしきしき  
 公奥も落も大勢中しきしきしき  
 角力あをうりしきしきしきしき  
 高砂山越えしきしきしきしき

湖山  
 鬼堂  
 千所  
 似山  
 月共  
 曾外  
 雪丸  
 雲三  
 秀香

嗚子あゝの谷むい

在仙道江  
不令

若の目結暮るるたれら神せり

三醒

蒲云英と事と片と舟の棹

且

編書あやむと娘を託人へ来り

二

借書くハ加り百夢一夢甚

日人

心梅子後まの又白く酒友と来

山嵩

片月梢くさるる花をけり

車真

空しく是淋し小島の筑波山

玄園

沈みあつひく日あり花光飛

志月

不控を難の致るる以時和らそ

琴月

辞世

八

笑の輪くら直く上涼くもそ界成

杯之

まろと女を娘月も経るる芦うを

醉月

我袖より所を坂城せりかの蝶

若羅里

山菜あやめあひの雲の行り

三鳴

初秋の来てあつるのそ水田う奈

保山

茶の香や箴の蝶けりあやう奈

三保

中新田

若羅里

三鳴

保山

三保





山形秋のあややしこくと登り附  
 笑う同く日々残りも色まの海  
 不ふや流きしとさるそのの岸  
 親くあや甲も秋のあやし海見を  
 朝もあやまのせももさかりり流  
 鳥の音見の起くやう利しとさる  
 凍鰯の瞬く半北北執りさふ  
 松の月を北あらしふさるあ  
 鐘の色まの騒と押しとし

後 友六  
 坪一也 吐牛  
 全庵主人 南陽  
 後 芙蓉  
 東三  
 荒園  
 同志  
 淇升

鳥の毛北ぬりしとさる水見利  
 折りし月あらしとさる  
 宮城野もあらしとさる中のみ  
 木免の片西もさる時あらし  
 雨を望みたりとさる今月の  
 湖の水波溜えあらしとさる  
 秋のあらし尾もさる錦や盛年し  
 思病をあらしとさるは社宇  
 雪やそらしとさる

完里  
 梅長  
 乙見  
 文桂  
 東原  
 後 碓松  
 古久傳 巴調  
 一ノセキ 岩井  
 圃翠

江戸の雪も一鳥の月あそぶ床の匂  
 葉を思ふも菊の帰りに松の月  
 山茶もやとさうさう花のあはれ  
 清らなるも浪うけつらなる鳩根茂  
 浮世とどく日く降くく雪のあ  
 船持の人か舟をりや牡丹笑  
 何れもらも秋を来さるる雪の雪  
 黒羽のやうさかしくと二まきり  
 半の尾お引や花結の初氷柱  
 八斗  
 几路  
 廿年  
 團華  
 几路  
 去く  
 山首  
 去く  
 字松  
 一壺  
 遊湖

虚の中は誠を以て死すを  
 わらわらわら初ささきりて山  
 我星の梅も二月人今節のま  
 山吹のむくくをあらき梅の實  
 雪のやわらと酒を飲るる  
 降るるなわらう床てあれ窓の懐  
 蔓草のちきあらしの胃魂  
 米むしの羽くく己月の雪も  
 磯將水のむくく人今節の初  
 里  
 菊  
 二  
 一  
 水尻  
 戸  
 完車  
 戸  
 完車  
 戸  
 完車  
 戸  
 完車

おきほくや鹿狩りつし表 完車  
 月むのきこやけしきさる海 戸汲  
 江の西の風こしけり星水 完車  
 うつくしきみら未より紫谷り海 方耕  
 物の香のあこころなるふ交の宗 岳庵  
 時ふりや粟津と須の懐 熊肩  
 梅登む我名呼子き誰の子也 百方  
 月まのほろき麻ぬらんさるの如 玄魁  
 物くらきも只置よとさる交 如水

葉のむくや危前り現き箱 漢州  
 蝶鳥の今日も波借き心う茶 星河  
 聞到る只の鳥をりあるの馬 氏府  
 名月や花のあるなり松の陰 連石  
 新釣籠の傍寒し掃花 海舟  
 包ぬをぬる心地せんさるのやみ 文哉  
 雲の戸や雲の枝持のさる海 其遊  
 雲の位渡りしと馬り難 曉水  
 七月の命のあるに右辺とを海 士觀

ある赤い二せめて一日似よみくは  
月夜中そののともなる膝抱え  
見つけしやる蝶の鼻色に更を秋  
枯れをくく見つけしやる我老也  
羽の葉おれんことそまはわく飛  
花のあふ髪買うの来りる色  
あつちや田中の秋よるの行く  
寒きとぬくひし物を楊柳  
心鳥を拍らぬ年とあふく色

園翠  
玉手  
天亮  
守思  
百拳  
巢樹  
己淳  
三富

相中

十一

虫鳴中あつちやる星月ぬ  
あつちやるたき葉の亭定い  
暖やふも産るこくやあつち  
半のの鞍馬を下るる葉のな  
雲のやうにわけてあつちやる  
あつちやる巻けはあつちやる那  
水底に秋の暮らあつちやる  
蝶飛やあつちやるあつちやる  
草分けはあつちやる草花あつちやる

百拳  
天亮  
士富  
三富  
東竜  
斗友  
南揚  
東竜

松川

鉄板跡をみるもいさよひの夜も  
 折らぬあめそは暑りのくくらすも  
 物中蟬の聲哀れむらむら  
 船のこゝろを思ひくさき月の蜀魂  
 樹のこゝろの波も海は若急く  
 坂のこゝろ二日帰らぬ心  
 一衣難遣くさき唯のこゝろ水  
 久し舟のや眉ふき刀鍛冶  
 早の八日とく様らる心地の空  
 斗 同  
 折 如  
 東 童  
 連 女  
 遊 放  
 玉 齒  
 東 童  
 南 揚  
 東 童

ね松の月をさうさぬさむし時  
 樹の風を寂るもあつた急く  
 空の月雪の障也い麻白く空  
 串干しの坊よりやしつら風  
 一葉もや水も月友の支度する  
 さあくと蟬のこゝろはくさき唯  
 空を貫くさき波りもさうさく空  
 秋代くさ空もさうさ秋の月  
 改めぬ蟬のこゝろはくさく空  
 斗 同  
 折 如  
 東 童  
 連 女  
 遊 放  
 玉 齒  
 東 童  
 南 揚  
 東 童

旅愁の院見せり秋の風  
 しのびしつゝの空鳥もせの横を  
 笑しきつゝの二日張るる雲本より那  
 梅の咲室に似あつて戸の末を  
 岳の山を攀へるをいふは  
 旅の者ももつて早やせよとありて  
 近所の山をぬきしつゝ野の  
 夕の蝶はよきなりし罪なりと  
 山にゆくはあはれとて海に  
 己鳥

嘆息し約束をせり山に鳥  
 秋の山に影ありて雲小豆  
 涼風や今も月を木の葉に  
 掌にありて影ありて雲小豆  
 秋をくたはるる雲の裏の  
 岩の頂に月をくたはるる  
 夕の影ありて雲小豆  
 城の山に影ありて雲小豆  
 山にゆくはあはれとて海に

カク

秋

舟

廿

羽遊 同之 紋子 秋吏 白雅 素白 皓月 景明 好遊

八月廿四日 山形 あり 仙風  
 粟の穂や小持くくらの里使り  
 城のさそ批習ふの峰 乃色  
 鍋つらふの湯無そ保ゆきん  
 花さくくあふや白螺のあま鳴  
 鳴くあふとふや梅千のひら  
 山溪の海士も肩さき 蘇さく  
 送りや鐘鐺貝そ来し泊り客  
 多うあや宙よ涼しを松操  
 仙風 二及 青ま ぬしめ 一歩 下之 随馬 去洞 百古

今の中事 志らる 老きふ不花  
 莖かき子くくや欲く消ふ危  
 猿数寄の猿 益せしらの草  
 大庭あふ大走るをうく夕奔  
 欠し 野まの柳のまい事  
 松梨子と母志も子も月あふ  
 胸と市しきく思ふ新の山  
 大いあふ思ふの附く歩り柳茂  
 野山く 鳴りくくあふ良や梅のを  
 保智守 馬年 梅男 兼天 子葉 松政 亞同 市鴉 有駒

以感也之帰るを西のさき  
 市馬  
 街秘蔵の羽織着せり久遠  
 聴西  
 松枝嘆山寺のつらきさめり  
 保昌羽織  
 秀阿  
 虎杖の中や小里の酒を  
 抑坡  
 京はあつて

新橋のあやめ着る酒二合  
 柳郎  
 半輪月暗く三色山吹裂く猿こらう  
 松栢  
 湖の蛇人きくもなうりり利  
 東臯  
 投あけく早業千とく屋根の秋  
 如水

身人送りハ慨ハらうり  
 東臯  
 畑買の董七葉と栢  
 祐素  
 蓮織京の美女あつて古の風  
 役  
 古明  
 夕くきて黄昏て栢のさき  
 日飛  
 忠駿  
 唯う時あつて山の手  
 相  
 相  
 九りもなうてさき  
 相  
 相  
 新ゆけのさき  
 相  
 相  
 新の雲も然やる  
 相  
 相  
 葉巻子揃え来てあつて鳴地  
 相  
 相

秋の暮詠を末よかり袖の白ひ  
 雪の心さき梅の花二里ん  
 山景を中油の汗香寺の酒  
 有葉目の中の香さぬ履さいて  
 鞆三層より響く秋の音  
 私に葉のなほは月津川成  
 初寒を鳴く鶉の秋の音  
 野を渡る鴨の鳴く葉枯  
 若く軽く甚浪真のそよ風

一 桃  
一 桃  
一 桃  
三 仙  
松手  
湖鳥  
比布英  
南溟  
松

麦の露暫時消さず  
 もんちとある梅の心二里ん  
 釣の餌は活きなく蛭蚓をわき  
 立秋の初も名さしけり夫人  
 嘆支度さすて送る杜若  
 十月や濂干紙の落るあり  
 初雪を葉平の裾ひくさるり  
 秋意をさすや時々の作り下戸  
 灯を六ふ葉の心さるりりり

皓白  
呂生  
篋二  
卵啼  
可成  
松手  
東坊  
赤月  
草花月

東山 吳まの花盗人の恨と交 東山  
 坂真の風よと舞らも花のつら 東山  
 ちとちと西山持てて高き 東山  
 我旅床の廻りの水跡 東山  
 重のや折きて淡神の 中村  
 山持て起しの水跡 東山  
 離れ人の住るや 東山  
 松木も志は 東山  
 不如帰月 東山  
 天音 東山

衣更を窓の 梅一  
 思の早の窓 梅一  
 葛水や菟の 平良  
 家一、花 百枝  
 来りや今 梅英  
 風よ舞 田二  
 朝風や花 松井  
 移りて 太珠  
 藤 梅一

月は濃蝙蝠をくものくもの水  
 古馬鹿  
 初時馬  
 福乳  
 大葉  
 邑哲  
 盲田  
 杜西  
 一之  
 和為

遊戸を風の漂りくもの水  
 後皮  
 岩樹  
 素吟  
 得え  
 小石  
 晋菽  
 信堂  
 二篇  
 芥約

木曾山と秋ふ志も利、蝸牛  
 此の穴ふあつたのち、乙月、骨  
 りり秋とや、鳥、小鳥、  
 山の色、柚子、譲り、越、青、九月、  
 さ、波、や、杉、の、下、水、系、  
 陽、わ、い、ま、蚊、お、お、つ、け、  
 雪、車、柳、や、雀、き、り、  
 芋、粥、の、耳、  
 苔、の、戸、の、夕、日、  
 鳴、の、夕、  
 素、夜、  
 楚、流、  
 一、志、  
 仙、子、  
 小、阿、  
 米、二、  
 免、列、  
 其、桂、  
 百、夕、

改、  
 小、  
 四、  
 早、  
 菜、  
 小、  
 右、  
 世、  
 夢、  
 日、人  
 小、阿  
 山、  
 田、  
 上、  
 件、友  
 花、  
 防、  
 立、邦  
 空、城

梅柳の影もささるるのびらさるる  
楚の

杜宇苗代の住も寂しく別  
小舟 扇友

あつたれ使ひくさるるのびら  
葛火

あつたれ使ひくさるるのびら  
舟

已の代も言はず見くさるる水鶴  
信子

梅の影もささるるのびら  
馬来

あつたれ使ひくさるるのびら  
葉茂

あつたれ使ひくさるるのびら  
草路

あつたれ使ひくさるるのびら  
辟月

蝶をて石の頬もあつたれ  
茶漬

船も飯喰ふあつたれ  
紅節

あつたれ使ひくさるるのびら  
二家

あつたれ使ひくさるるのびら  
鏡子

あつたれ使ひくさるるのびら  
南宮

あつたれ使ひくさるるのびら  
双帆

あつたれ使ひくさるるのびら  
石花

あつたれ使ひくさるるのびら  
南宮

あつたれ使ひくさるるのびら  
南宮

怪源娘や山の藁とよみぬの神 大曲 玉童

くまの松のくまのくまのくまのくま 坊田 雲底

初鴨ふ舞心ぬき舟常り 花町 燕貞

名くまの例ちうきを竜田娘 花町 杉子

桐の吹風を吹く 花町 燕貞

氷くまの吹風を吹く 花町 燕貞

氷くまの吹風を吹く 花町 燕貞

氷くまの吹風を吹く 花町 燕貞

氷くまの吹風を吹く 花町 燕貞

種もろもろ 狐穴

お新 一歩

酒買 葉舟

隠 且雪

外 笑

菊 軒夜

刈 東旅

穀 素竜

穀 素竜

西風や 舟のしるしの夕棹らん 潜竜

百葉ののちもまはるすゝの山 孟三

海風ふ 向く流おく 海月の舟 干丸

酒賣や 木槿の糸の毛軒町 連枝 少年

啄不鳥も 己の羽ふ 秋たぞ 車鳥

忘れぬ 不羽立 日我誘へ 初虫 任衣

桜桐の毛を 麗よ 以二月の舟 仙眉 古首

木嵐の 火を海まよ 夕 抱 已友

氷室を 今白き 雪の思ひ 夕 夏 説阿

あつらふ 病のうら 龍も食ちる 且 林

冷けふ 福を 月め 流るは 山 竹止

一も せと せと 竹 山 如山

波の 光の 昼を 夕 竹 山 如物

秋の 日の 光を 夕 竹 山 尾山

雪の 花の 山を 夕 竹 山 主支

もさく 花の 山を 夕 竹 山 心阿

福の 花の 山を 夕 竹 山 京州

鏡子のあはれも色あはれも流尾のふらふら 約研 秋曾

浅草生や 脊たうし 目事 富田 秋曾

燭のぼやうや 伊予 玉守

まのあはれあはれも 金山 景内

秋風や 暮を 九炎 子夏

まの秋の姿見よ 九炎 雨鶴

秋の鳥 雙日 九炎 龍氏

災節も 九炎 景舟

定月や 九炎 文雅

月あはれ 角田 来鳥

紅の袖子 善のあはれ 角田 彦州

掃きや 白石 東安

小免も 節供 白石 十休

嬉人 大塚 太呂

焼栗 大塚 竹舟

山々の 庭所 大塚 三浦

と先 大塚 堀磯

花を種く月口くくやう平し

舟園状

風毛

董中是きうのわきらひの痕

槻木

石文

中んを月や鹿の後や里

安石

中月の流し鶴馬の木の芽黄

舎面

輝池

り秋や野なまくれの一節ふ

前本

文人

塘のふ首の窓や陣町可

五時

秀松

湖のふ首の窓や陣町可

五時

秀松

今日くくのなまくれの陣町可

采松也

秀松坊

その中を外かきくも中

旭山

あまの摘も弓之に茶の白し

あまの

月を身く鳥の兒をり子親

笠崎

風毛

永日や乳子の堂のうけは師

長師

倉三

あまの摘も鳥の兒をり子親

笠崎

曲松

小まの摘も鳥の兒をり子親

曲松

日の風を乳子の堂のうけは師

竹志

足るを乳子の堂のうけは師

田高

巖水

仁知ちや乳子の堂のうけは師

能高

巖月

大津のそとぬも言はぬ

物形之...  
年...  
物...  
味...  
...  
...  
...  
...

仙坡  
紫之  
竹雷  
銀毛  
敬  
桂扇  
到機

...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

鉢のあをけりえもゆるゆる

士由

あまのまのあまのまのあまのまのあまのまの

仙坡

ぼろぼろのぼろぼろのぼろぼろのぼろぼろ

由

こころすけのこころすけのこころすけのこころすけ

坡

おろろのあをけりえもゆるゆる

由

田に通く一此船のあまのまの

坡

あまのまのあまのまのあまのまのあまのまの

坡

あまのまのあまのまのあまのまのあまのまの

巢

あをけりえもゆるゆる

士由

あまのまのあまのまのあまのまのあまのまの

五

あまのまのあまのまのあまのまのあまのまの

居

あまのまのあまのまのあまのまのあまのまの

由

あまのまのあまのまのあまのまのあまのまの

居

あまのまのあまのまのあまのまのあまのまの

由

あまのまのあまのまのあまのまのあまのまの

居

あまのまのあまのまのあまのまのあまのまの

居

ひびきしるのさかしのさかしのさか  
しめのもつはらのけりさよさか  
削むお舟よさかしのけりさ  
雲むねと見えぬけりさよさか  
売のすけりさよさかしのけりさ  
飯無のけりさよさかしのけりさ  
さよのさかしのけりさよさか  
秋のさかしのけりさよさか  
ひびきのさかしのけりさよさか

由 答 由 答 由 答 由 答 由 答

及よりさかしのけりさよさか  
誰おのけりさよさかしのけりさ  
さよのさかしのけりさよさか  
さよのさかしのけりさよさか  
さよのさかしのけりさよさか  
さよのさかしのけりさよさか  
さよのさかしのけりさよさか  
さよのさかしのけりさよさか  
さよのさかしのけりさよさか  
さよのさかしのけりさよさか

由 答 由 答 由 答 由 答 由 答

意の切もは花のうらみ  
紙のあやかしも葉のひやしの  
抽味増ししとて空のうらみ合せ電  
けし火自燭の火のしるし来る  
をりし時時の数をいふとく  
ふ中を日とてさきも圓の二月  
初花ふよふ花の葉もくはは  
あつとてさきもくははひつと

由 人 由 人 由 人 由 人 由 人

なまきりし葉のうらみ  
くももは花のうらみ  
さきもは花のうらみ  
連の葉さきもは花のうらみ  
立掃の葉さきもは花のうらみ  
秋の葉さきもは花のうらみ  
霧の葉さきもは花のうらみ  
縮れし葉さきもは花のうらみ  
さめし葉さきもは花のうらみ

由 人 由 人 由 人 由 人 由 人

おもしろいおきむけり敷郷  
みりしうらぬまきと投後入  
深の出るあつしつてはさる  
地をたき箱の市日さる成  
筆の野の毛おきむしつて  
さつしつて月は秋雲をさる  
花のさめみけはあつて  
菜のまきをさるしつて  
拾の原やそんしつて

人由人由人由人由人

節のさふ中代るさるさる  
秋の警しつて流きさるの勢  
長く月おの客もめしつて  
さる海あつて連歌あつて  
師生さるさる初雪さる  
今さるの秋把もあつて  
流倉の雲とさる秋は昆  
身さるの布さるさる

古由  
流  
信知宇  
古  
馬  
由  
台  
宇

與之旨家必有必  
 奴僕之具知家  
 者命之謂讀代  
 被官名子水吞矣

色つまのわがこゝろ綿木を草草  
 機織りしつゝぬる海のもの  
 形つゝの風花草もささり  
 葉の盛れた月のしほり  
 みつゝのよのよの長きをさすも  
 雲をさすもさすもさすも  
 病む牛をさすもさすも  
 草の飽きもさすもさすも  
 沖塗りの紙帳のよるをさすも

由馬古宇由馬古宇由馬古宇

田のつゝのつゝのつゝのつゝ

馬

鴨の腹のつゝのつゝのつゝ  
 深のつゝのつゝのつゝのつゝ  
 皆のつゝのつゝのつゝのつゝ  
 窓のつゝのつゝのつゝのつゝ  
 細のつゝのつゝのつゝのつゝ  
 こゝろのつゝのつゝのつゝのつゝ

風を  
 古由  
 古由  
 旭山  
 由

十月十一遊りて花も  
 二日おまの二日ありあし  
 酒もやまかきも飽き  
 飲もひくも水もあまあり  
 夕陽の遠路田舎に記を  
 してさきもさきも  
 夕陽の遠路田舎に記を  
 してさきもさきも  
 夕陽の遠路田舎に記を  
 してさきもさきも

由 由 由 由 由 由 由 由 由 由

鳥もつれまも羽織も  
 盗れも出も物も秋も色  
 確あもりの瀧のいそ  
 月あもりの今もつれも  
 野もあもりのあもりの  
 望斗様名の木もあもりの  
 連敷も食もあもりの  
 あもりのあもりのあもりの  
 板もあもりのあもりの

由 由 由 由 由 由 由 由 由 由

追加

丹波の山は...

千影

宮城の山は...

鷹

冬牡丹の...

文来

吹く風...

李

ひくく...

大坂

...

...

...

...

...

...

我とて... 鬼貫... 草の戸... 梅白... 月ハ... 野ノ... 野鳥... 思ハ... 枯草...

三本 女 探明 素建 底白 之有 水戸 湖中 米谷 玉垢 仙府 喜之 肯桃

木枯や波おこる法はく業螺貝

芦村

燦爛や紅雲つらきしめり

北来

山の端をいそぐるやみこりのり

宇蘇

氣のつらき数の日事や冬の枝

白湖

あふきのあふくはる海や山の月

白魚

しらの水の流る船と舟の揚

木山

およ年の新しきあはれ月の丹

岩奴

涼しやあはれよ人の形や舟

月奎

夕山や流るおよるもの影を年

寛北

世に花鳥の類をとりてははるる文ありて  
人におのねめを流るる勢はかゝるるに  
ありしはれがまゝにたゞて山谷の如し  
此のうへ海をさすのむらぶ中より文を  
風色うきくれきるあはれをてし  
らしめて西行と入りのあはれを  
のまはれしとて東山と南部

の浦くしりて書志ありて世に  
れきる徳と成たりて文雅を  
とて人むとて月がまはれ  
あはれをさす浪のうき  
かゝる心乃卓出るる古  
せりしとて本にわらわ  
山氷の致意し世に  
とありてあはれをさす

此れあるの海...  
 所と抄の...  
 あり...  
 あり...  
 あり...  
 あり...  
 あり...

江戸の随人随命

跋



仙臺国分町  
 加志和屋正六様

